

英語教育における口語コミュニケーション 能力向上のための一考察

堀 江 周 三

A Study for Improving Oral-communicative Skills in English Education

Shuso HORIE

Key words : コミュニケーション能力 communicative skills, 音声聴解教授法 audio-lingual method, 動機付け motivation, 言語干渉 language interference, 比較分析 contrastive analysis, 言語認識 language perception

1 はじめに

長い歴史を持つ日本の英語教育にも、ここ最近、大きな変革が見られるようになってきた。これは、国際化が急速に進む現代社会において、日本でも英語教育の重要性、とりわけ口語による英語コミュニケーション能力育成の重要性が以前にも増して求められようになってきたことによるものである。特に、最近の親は自分たちの子供に対して、幼少期から英語に触れさせることによって、英語コミュニケーション能力を持ち、国際的に通用する日本人に育てたいとの願望をより増大させている傾向が見受けられる。

そして、これに呼応するかのよう、平成20年度3月に公示された新学習指導要領には、小学校高学年児童を対象に、外国語活動として英語教育を開始することが盛り込まれている。この外国語活動の目標には、授業を通して、「外国語音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ということが明記され、従来から学校教育で続いて来ている、英語表現を読んで日本語表現に訳したり、日本語表現を英語表現に変えるといった英語教育から脱皮することが求められている。

このような動向に対応して、平成20年の夏休み中に全国各地の小学校の教員を対象とした研修会が、国内の大学の英語教員の協力を得て開催されたのであるが、その指導方法や指導内容等に関して、数多くの問題や

課題があると考えられる。そこで、本稿では、実践的英語能力としても特に重要であり、同時に小学校での外国語活動の指導の際にも要求されている、学習者の英語の口語コミュニケーション能力を向上させるために重点的に考慮されるべき要点について考察していきたい。

2 英語教育の実施環境

(1) 英語教育における外的要因

歴史的にも、社会的にも、大多数の日本人は第2次世界大戦終了時まで、単一言語集団の社会で暮らしてきたと言っても過言ではなく、ごく少数の人たちが口語英語コミュニケーション能力を有する時代が長く続いてきた。そして、戦後になって、ようやく全ての子供を対象とする本格的な英語教育が開始されたのであるが、その中心は、古くから行われてきた、“grammar-translation method”⁽¹⁾ と呼ばれる、文法教授と相互言語への翻訳を中心とした教育であった。

その後、日本が輸出立国になっていくにつれて、欧米を中心とした民間人レベルでの交流が盛んになり、英語教育においても、会話に重点を置いた口語英語コ

⁽¹⁾ 著名な言語学者であった Robert Lado (1964) は、“grammar-translation method”について、“grammar recitation and dictionary thumbing”と表現しているが、長く続いた日本の英語教育は正にこの方法が中心であった。

コミュニケーション能力の向上を目指す必要性が議論されるようになり、当時の文部省も学習指導要領の改訂の際に、このことを盛り込むようになってきた。そして、この会話に重点を置いた口語英語コミュニケーション能力の向上を目指すための教育方法として、二人の著名な言語学者である Robert Lado と Charles Fries によって発案された、“audio-lingual method”⁽²⁾ が英語教育の現場でも導入されるようになってきたのであるが、若い世代の人たちの英語の口語表現能力を観察する限り、今日まで大きな成果は上がっていないというのが現実のようである。

これには、日本に住む外国人の数が少なからず増加する傾向にはあるものの、基本的に諸外国とは地理的に切り離され、英語を学ぶ生徒たちの多くが日常的に他の国々の人々と容易に交流できる状況には置かれていない日本では、国際語としての英語修得、特に英語コミュニケーション能力の修得の必要性が低いことがその最大の要因として挙げられる。そして、このような日本の現状を踏まえて、日本の英語教育の問題に関する著書のある Curtis W. Hayes (1979) のように、2ヶ国語を自由に使えるような教育目標を設定し、口語英語コミュニケーション能力の向上のみに主眼を置いた英語教育は、日本での英語教育に適しているとは言えないのではないかと意見も見られる。

“Some societies, especially those which are isolated geographically from foreign speaking areas, must realize that bilingualism is not an educational goal to be realized by every student, that even the ability to read with fluency may be more important in those areas where there is little, if no, opportunity to use spoken language, that there is an aptitude for language learning, suggesting that some students will learn faster than others, and that grammar and translation are not requisites for learning a language.”⁽³⁾

しかしながら、日本での口語英語コミュニケーション

(2) この言語教育のための教育方法は、アメリカインディアンの言語研究の成果として発案されたものであったが、その中核となるものは、“pattern practice” と呼ばれる、英語表現の一部置換を中心とした、音声による反復練習で構成され、現在でも英語教育の中心となっている。

(3) Curtis W. Hayes. “Language Contact in Japan” in *Socio-linguistics Studies in Language Contact*. Ed. by William Francis Mackey and Jacob Ornstein. Mouton Publishers. New York. 1979. p.373

ン能力の向上を目指す教育には、このような歴史的及び地理的などの障害がある一方で、若者を中心とした英語圏文化への憧れが依然として根強いという社会風潮が存在し、強い追い風となっている。このような風潮は日本に限ったことではなく、世界的に同じ傾向が見られることが以前から数多くの報道や、研究結果で明らかにされてきているが、現在もそのことに変化は見られない。その1例として、Bruce Pattison (1976) の著書には、次のような記述が見られる。

“With many young people in many parts of the world, English is somewhat fashionable—not the English they are taught at school, but the English associated with a more swinging life-style than they are accustomed to.”

また、先ごろ大きな社会問題として大きく報道された、大手語学学校の突然の閉鎖により被害を受けた多数の英語学習者の存在、街中に相変わらず見られる数多くの英語を中心とした語学学校の広告看板の存在、Web 上に見られる口語英語コミュニケーション能力育成に関連する数多くのサイトの存在などを考えると、多くの日本人の英語学習者が考えている達成目標は、口語英語コミュニケーション能力の向上にあると言わざるを得ないのである。そして、このことは前述の新しい学習指導要領に盛り込まれている外国語活動の到達目標と合致するところでもある。

(2) 英語教育における内的要因

多くの日本人にとって、外国の人々との日常的な交流が容易な状況に置かれていないことについては前述の通りである。しかし、このような学習者を取り巻く社会環境などの外的要因以外に、英語教育を通して、口語英語コミュニケーション能力の向上を目指す教育目標を達成するためには、学習者固有の因子として存在する内的条件についても考慮する必要があることが、多くの研究結果からも示されている。

Leon A. Jakobavits (1970) の研究結果によれば、外国語学習の目標を達成するためには、次の4つの要因がそれぞれの割合で関係していることが紹介されている。これらの要因については、他の語学教育の研究者も同様の研究成果を紹介している⁽⁴⁾。

- ① 語学学習の素質 (Aptitude) 33%
- ② 知的能力 (Intelligence) 20%

(4) Denis Girard (1977) などにも、この研究成果を支持する結果が紹介されている。

- ③学習への根気力 (Perseverance) と動機付け (Motivation) 33%
- ④他の要因 (Other factors) 14%

この結果から考えてみると、学習者が本来持っている英語学習のための素質と知的能力、さらに個人の性格が英語コミュニケーション能力の向上に重要な役割を果たしていることは明白であると言える。しかし、同時に英語教育の開始の段階で初めて関係し、学習の目標達成に関連する因子の1つとして挙げられている、学習者に対する「英語学習の動機付け」という要因についても、口語英語コミュニケーション能力の向上を目指す教育においては、特に考慮されなければならない事と考えられる。

この英語教育における学習の動機付けについては、前述した学習者を取り巻く日本社会の地理的条件や社会環境を中心とした議論が数多く見られるのであるが、更に多くの面から検討する必要があると考えられる。例えば、外国語教育の研究者である、Denis Girard (1977) は、次の4つの要素が外国語学習のための動機付けに大きく関係していることを報告している。

- ①社会言語学上の背景 (Socio-linguistic context)
- ②言語学習への学習者生来の素質 (Learner's natural aptitude for language learning)
- ③教育方法 (Methods)
- ④教師 (Teachers)

ここに挙げられている4つの要素の中で、前の2つの要素は学習者に固有のものとして存在するものであり、語学教育によって直接的に改善される性質のものではない。しかし、後の2つの要素、つまり、「教育方法」と「教師」については、英語教育を行う現場に携わる人物によって大きく変化する要素であり、優れた教育成果を全国で均一的にあげるためには、英語教育に関わる全ての関係者が、それらの重要性をもう一度、十分に再認識し、教育に臨む必要があると言える⁽⁵⁾。

このことから、今の日本社会で強く求められている、口語コミュニケーション能力の向上を目指す英語教育における教育効果をあげるためには、教師自身がいろ

いろな教育方法や技法について精通し、教師としての資質を備えるは勿論、特に、英語と日本語の言語学上の違いとその相互の干渉問題についての十分な知識を蓄えた上で、その教育に携わることはより重要であると考えられる。

(3) 英語教育における母国語干渉の問題の認識

口語コミュニケーション能力の向上を目指す英語教育において、教師は学習対象言語である英語に関する言語学的知識を所有していることを求められるのは当然であるが、同時に母国語である日本語に関する言語学的知識を所有していることも、また求められることである。これは、英語教育を担当する教師が、日本語の言語学的特質が学習者の口語英語コミュニケーション能力の習得過程に干渉することを十分に認識し、学習者の各学習段階で発生する様々な干渉問題を把握した上で、その教育方法や技法を適用することが特に大切だからである。しかしながら、残念ながら、この母国語干渉の問題を十分に考慮した英語教育は、多くの日本の英語教育現場では実践されておらず、結果として、今日の若い世代の多くの人が英語コミュニケーション能力の不足に直面する事態を招いていると言える。

語学教育における母国語干渉の問題については、以前より応用言語学を中心とした言語教育に関係する分野で数多くの研究結果が紹介され、多様な形で学習対象言語の習得に影響を与えることが紹介されている。例えば、John M. Lipski (1976) は母国語干渉の問題について、次のように、2つの言語が接触する場合には語彙、音韻体系、そして、統語構造の各範疇で必然的に起こるものであると分析している。

A situation of languages in contact, particularly one characterized by a large amount of bilingual interaction, inevitably leads to the influence of one language upon the other.

……省略……

Interference between languages, while encompassing every conceivable form of linguistic structure, may be divided into three categories. The first involves lexical interference, that is, borrowing of entire words or phrases. The second case is phonological interference, involving the transfer of sounds or sound patterns from one language to another. Finally, we come to syntactic interference, involving the formation of words and

⁽⁵⁾ この重要性については、Bruce Pattison (1976) などにも、それを裏付ける研究結果が書かれている。

phrases, the transference of patterns of word formation from one language to another, and the shift in meaning of partial or false cognate form.

このように、語学教育における母国語干渉の問題は、英語教育に携わる全ての教師が必ず理解を深め、教育を行う際に十分に考慮しなくてはならない重要な事である。そして、英語コミュニケーション能力全体の向上を目指す英語教育を実施する場合には、母国語である日本語の音韻から統語構造に至る言語学的特質が、学習対象言語である英語のそれに干渉することを正しく認識し、この問題に関する音声学、音韻論から統語論に至るまでの幅広い言語学の知識を十分に備えた教師の存在が、その成果を上げるために重要な要因となる。

特に、本稿の主題である、わが国における口語コミュニケーション能力の向上を目指す英語教育においては、音声学と音韻論の知識を基に、言語の第一構成要素である音韻（体系）の特質が大きく違う日本語と英語について、それぞれの言語の音韻（体系）全体の違いについての的確な認識と判断をし、2つの言語の音韻（体系）相互の干渉問題を予測した上で、発音指導に当たることが第一に求められることである。そして、さらに意味論や統語論の知識を基に、日本語と英語では大きく違い、学習者に混乱を引き起こしている語彙や表現形態の相違を明確に認識して口語コミュニケーション能力育成のための指導に当たることが必要となってくる。このように、母国語干渉の問題を認識し、英語と日本語の比較分析能力を教育の場実践的に生かせることができる教師は、社会が今求めている、英語の口語コミュニケーション能力の向上を目指した英語教育で、優れた教育成果を達成するために必要不可欠の存在であると言える。

(4) 英語教育における言語の比較分析能力の必要性

口語コミュニケーション能力の向上を目指す英語教育において、英語と日本語に関する言語の比較分析能力が、教育現場の教師に強く求められている理由については前述の通りである。特に、音韻から統語構造に至る言語学的特質が日本語のそれとは大きく異なる英語について教育を行う場合には、2つの言語を構成する各要素の言語学上の違いを明確に認識し、それを学習者に比較、分析して的確に説明できる能力は、その教育成果を左右する大きな要因の一つである。そして、言語は階層的構造を持っているという観点から考えてみると、英語の口語コミュニケーション能力の向上を

目指す教育においては、学習者は学習対象言語である英語で使われる音（韻）を正しく認識し、母国語のそれとを正しく比較認識できる能力を育成することから始めるのが最も基本的で重要であると言える⁽⁶⁾。

この能力を育成するためには、教育を担当する教師の側が、先ず、母音と子音の発声の仕組みの違い、母音と子音の種類と数の違い、母音表と子音表の比較による音韻体系の違い、2つの言語間の母音と子音における類似音（韻）の細部の違い、類似音（韻）に起因する発音干渉の問題、アクセントやイントネーション等の超分節素の違いなど、音声学の領域に関する多岐に亘る知識を所有した上で、英語と日本語の音（韻）に関する言語学上の相違について、学習者に分かり易い解釈を加えて教育することが必要とされる。また、さらに教師は、この音声学の領域に関する多様な知識に加えて、英語と日本語の音節構造の違いや、近接音の影響による音韻変化、音韻法則による発音変化など、音韻論の領域に属する知識も所有し、各相互を関連付けながら、平易な説明をしたり、学習者の英語の発音上の問題を的確に分析する能力を備えていることが必要とされる。

このように、英語の口語コミュニケーション能力を真に向上させる教育を実施することを目指すためには、先ず第一段階として、教育を担当する教師が英語と日本語の両方の音（韻）に関する正しい言語学の知識を所有し、それを基に両方の言語を比較分析して、その知識を応用できる能力が必要とされるとの結論に達する。そして、このような英語を実施するために教師に求められる言語学上の能力の必要性は、語彙と意味、統語構造など、英語の他の階層の構成部分に関しても同様である。

3 お わ り に

これまで、英語の口語コミュニケーション能力の向上を目指した英語教育を実践する場合には、教師は日本語干渉の問題を認識し、英語と日本語を言語学的に比較、分析することができる知識と能力を有することが必要であり、それは学習者が優れた教育成果を得るための一つの重要な要因であるとの考えを論じてきた。

⁽⁶⁾ 言語の階層的構造とは、言語が音をその構成基本単位とし、音節、形態素、語、句、節、文、段落、文章へと階層状に構成されていることを示す。拙著、「英語を学ぶ日本人のための基礎英語学」(2004) P.3-4にその詳細が述べられている。

しかし、言語教育における目標を達成するためには、そのような教師に求められる言語学上の知識や能力だけでなく、学習者の心理に存在するある種の知覚の問題も関係しているとの研究結果も考慮する必要がある。

この言語学習と知覚の問題に関して、例えば、A. E. Heike (1987) は、学習者が学習対象言語の音（韻）を聞き、その音（韻）を再び発しようとする知覚及び認識過程において、次のような、ある種の混同現象が起こっているとの分析をしている。

We step from the role of the speaker into that of listener we continue to be subject to production conditions in the sense that the acoustic signal we draw on for decoding is characterized by the effects of absorption phenomena.

この外国語習得過程における音（韻）の認識過程については、別の研究者も同様の研究結果を紹介している⁽⁷⁾。そして、その研究結果によれば、このような学習者の心理に存在する学習対象言語の音（韻）の認識過程には、母国語との言語干渉による中間言語が存在し、そのことによって発音を中心とした口語コミュニケーション能力の問題が発生しているとの見方をしている。

このような見方に基づけば、口語コミュニケーション能力向上のための英語教育を実施するに当たっては、教師は自らの言語学的知識と指導能力の向上を図るだけでは不十分であり、学習者の発する英語表現の中でどの部分に間違いがあるかを的確に認識し、その間違いが言語認識過程のどの部分で発生しているかを分析した上で、それを指導する能力も必要であると言える。以上の事に加えて、学習者が生活する社会の変革にも、英語教師としての注意を払わなければならないことは言うまでもないことである。

参 考 文 献

- 1) Girard, Denis. Motivation: The Responsibility of the Teacher. *English Language Teaching Journal*. 1977.
- 2) Hayes, Curtis W. "Language Contact in Japan" in *Socio-linguistics Studies in Language Contact*. Ed. by William Francis Mackey and Jacob Ornstein. Mouton Publishers. New York. 1979.
- 3) Jakobavits, Leon A.: *Foreign Language Learning*. Massachusetts. Newbury House. 1970.
- 4) Heike, A. E. The Resolution of Dynamic Speech in L2 Listening. *Language Learning* Vol. 37. 1987: p.123-140
- 5) Lado, Robert. *Language Teaching: A Scientific Approach*. McGraw-Hill. New York. 1964.
- 6) Lipski, John M. Structural Linguistics and Bilingual Interference. *The Bilingual Review* No. 3. 1976
- 7) Pattison, Bruce. Organizing Motivation. *English Language Teaching Journal*. 1976.
- 8) Titone, Renzo and Marcel Danesi. *Applied Psycholinguistics*. Toronto. University of Toronto. 1985
- 9) 堀江周三：外国語学習における母国語よりの影響による音韻上の問題—日本人の英語学習の場合、*広島文化女子短期大学紀要* 第21号, 1-7, 1987
- 10) 堀江周三：母音語干渉と発音教育— Production Error を考える、*中国四国教育学会紀要* 第34巻, 201-206, 1988
- 11) 堀江周三：英語を学ぶ日本人のための基礎英語学、*大学教育出版*, 2004

⁽⁷⁾ Renzo Titone and Marcel Danesi (1985) には、
"Speech perception (or decoding) is intrinsically connected to speech production (or encoding)." と述べられている。(p.48)

Summary

Social demand for improving oral-communicative skills in English is becoming much stronger than before in Japan. This is because Japanese has been internationalizing quite rapidly and the number of foreigners living in Japan has been increasing year by year.

However, majority of younger Japanese still have very poor skills in English oral-communication. Under such social circumstances, many parents in Japan want their children to be good speakers of English and become globalized people. As a result, they expect their children to have better education in English teaching at their schools.

To satisfy such social demand and improve education system for teaching English at schools, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology revised its educational guideline in March, 2008. By this revision, English education will be started at the 5th and 6th grade-classes in elementary schools emphasizing the teaching of oral-communicative skills.

Understanding the situation mentioned above, the writer discusses some key-factors to be considered to achieve a great success in teaching oral-communicative skills at schools in Japan. And the following result is obtained:

The first key-factor is Japanese English learners' environmental conditions. Geographically, Japan is isolated from foreign countries, hence most of the people can not obtain many opportunities to communicate with foreigners in English. And this factor is often connected with the lack of Japanese learners' English learning motivation, but it is not quite correct to say so. Because there are some other very important key-factors to be considered to teach oral-communicative skills in English.

One of them is qualification of English teachers. Nevertheless to say, English teachers have to own good personalities and teaching techniques, but it should be much more important for Japanese English-teachers to have wide variety of linguistic knowledge in both English and Japanese. This is because there is a significant language-interference between English and Japanese due to a great difference in their linguistic properties. To teach oral-communicative skills in English, it is inevitable to teach the linguistic property of English referring to the knowledge of contrastive analysis. Thus, a key to a great success in teaching English oral-communicative skills is the teachers with very good linguistic knowledge.

As a conclusion of the study, the writer also suggests that applying the technique of error analysis in learners' speeches is very important for language teachers. This is because perceptual interference can be related to learners' speech problems.